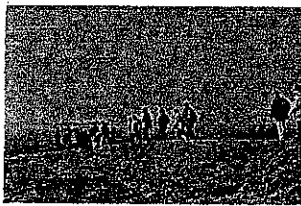




# 高槻市鶉殿ヨシ原

観察会&コンサート報告

## 鶉殿のヨシ 観察会風景



古来、川は文化や経済を育み流域に住む人々に多くの自然の恵みを与えてくれるものです。ユーフラテス川も黄河もインダス川にも特有の歴史が刻まれています。琵琶湖から端を発した淀川も京の都と商都大阪を結ぶ重要な河川。大山崎の山の端を境に淀川が大きく西に湾曲する辺り、枚方には「くらわんか舟」に語り継がれる文化があり、高槻にも平安時代からつづく伝統芸能「雅楽」と縁の深いヨシ原があります。

ここ鶉殿のヨシは、「人間の声」として表される筆築（ひちりき）のリードにもっとも適する水分量を含み、太さも外径12ミリ、国の重要無形文化財である雅楽を根底から支えてきました。淀川は適度に氾濫し、守口大根や寝屋川のレンコンを育むようにヨシの地下茎にも十分な栄養を与えてきたのです。1971年この淀川の治水対策が強化され、100年に1度の洪水にも耐えられるように改修されたお陰で、枚方市の住宅地図はずいぶん姿を変え、川のすぐそばにすら宅地が広がりました。一方、低下した河床のせいで鶉殿のヨシ原は乾燥し、良質のヨシは取れなくなりました。宮内庁御用達の「雅楽」の危機です。――

1976年から高槻市の自然保護相談員になられた小山先生はその年の12月からヨシの調査をはじめました。先生の案内を受けて現場に降り立ってみると乾燥したかつてのヨシ原は、オギやツル科の植物におおわれていました。97年には河川法も改定され自然環境の回復が急がれています。先生は鶉殿ヨシ原研究所の所長として水辺環境の改善を進めています。このヨシ原には国土交通省が年間2億円の予算を組んで導水路をつくり、揚水ポンプで散水し、ヨシを河川敷の水際に移植実験をしています。75ヘクタールの70%を目標にヨシ原の復元に取り組んでいます。

無駄な出費を繰り返す前に何か施す手が無かったのでしょうか？ヨシ原に目を向けてその自然の価値を見出しましょう。年に一度のヨシ焼きにも参加してみると新たな未来が見えてくるかもしれません。



「ヨシ・水・音」  
雅楽・編鐘コンサート風景

